35

多紀元簡『樞中鏡』について

成　高雅
京都大学 人間・環境学研究科 博士後期課程

医学考証学派の中心的存在と目される多紀家は，医学館を拠点に考証学的学問を発展させ，歴史的業績を残したことは広く知られている．しかし，その学問の発展と中国の学術の発達との関係性について十分に検討されてこなかった．多紀元簡（1754～1810）は，医学考証学派の学問を探るには最も重要な人物と言える．本研究で取り上げる『樞中鏡』は，多紀元簡が中国の書物の中から，蔵書に関わる内容を輯録・整理し，案語を付けて編集した著書である．刊行されたことはないが，複数の伝本が存在し，元簡早期の著書と見なされている．

『国書総目録』によると，『樞中鏡』の自筆本は無窮会図書館にあり，自筆本以外の諸本は国立国会図書館・九州大学・京都大学・西尾市岩瀬文庫・お茶の水図書館（現石川武美記念図書館）・早稲田大学の六ヶ所に所蔵されている．筆者の調査により，茨城大学・筑波大学と高梁市教育委員会社会教育課（旧高梁市立中央図書館蔵）にもそれぞれ一本所蔵されていることが確認され，それらを合わせると，自筆本を含めて少なくとも十種の写本が存在する．

無窮会図書館は近年閲覧を休止しており，北里大学東洋医学総合研究所に所蔵されている自筆本の複製本を用い，他諸本との校合の結果，自筆本は諸本より増補された内容が多く，おそらく諸伝本は自筆本作成過程のものを筆写されたと考えられる．蔵書印などから，当書が自筆本を含め江戸後期から近代の学者・文人・蔵書家の間に流れて読まれたことがわかる．

自筆本は二冊で構成され，一冊目の外題は「樞中鏡」であり，本文と続補が含まれ，以下本編とする．二冊目は外題「樞中鏡　続録」・内題「書嵓叢編」となり，以下続録とする．本編自序には寛政四年（1792）を，続補の冒頭部分には寛政五年（1793）を指す紀年がそれぞれある．続録の編纂時間は不明だが，案語に文化三年（1806）を指す紀年があり，元簡は少なくとも文化三年まで当書を増補し続けたことがわかる．輯録した内容は最初に「…云」「…曰」の形で記し，各節の最後に引用した書名を付す．増補した内容を含め，自筆本は本編本文71節・続補34節と続録27節の文書が輯録されている．自筆本以外の諸本はすべて一冊本で自筆本の補足内容を含まず，本編本文65節と続補最初の7節で構成され，諸本いずれも杉本樗園による寛政五年（1793）の跋が付されている．

自序により，本書は蔵書を志す人のために中国の蔵書家の所説を集めたものであり，蔵書マニュアル的な参考書として編纂したことがわかる．用いた資料に明清の書物が多いことが特徴で，網羅的に蔵書の話を集めたわけではなく，版本鑑定に関する内容を重点的に多く集めており，元簡の学問的関心が反映されている．

輯録した内容には，胡応麟『少室山房筆叢』・銭曽『読書敏求記』などを代表とする版本・書誌・校勘に関する内容が多数見られ，ほかに方以智『通雅』など清の学風を影響した考証的著書の引用も多数ある．これら著述との接触から，多紀元簡が考証学的学問に多く触れたことが明白で，その学術形成において重要な意義があると考えられる．また，輯録した内容から，元簡が版本としての優秀さを求める根本的要因はテキストへの関心という考証学的関心が窺える．編纂手法と案語の内容からも，引用した学者のテキストに対する客観的態度を賛称しているように見える箇所が多くある．こうした『樞中鏡』の考察を通じて，多紀元簡が中国同時代の学術（特に書誌学）を十分理解していたことがわかる．元簡ないし医学考証学派と明清の学術との接触を明らかにすることにより，その学術における影響関係を分析することも可能となろう．

※本研究は，日本学術振興会特別研究員奨励費（19J15164）の助成を受けたものである．